

企画 「若手からみた考古学」 要旨

日時・場所

日程： 2022年8月7日（日）13:00～実施

場所： Zoom

発表 1

「考古学からみた暴力の拡大と連動」

中川朋美¹

¹ 南山大学 人類学研究所 博士研究員

これまで国内外の様々な分野で、暴力というテーマは長く議論されてきた。日本考古学もその一つであり、考古学自体の学問的特性に鑑みれば、こうした議論に貢献できる部分は大きいだろう。その一方で、日本考古学では暴力の多面性が明らかとなったがゆえに、新たな課題も生じている。たとえば、今一度「暴力」とはそもそも何かということを考え、枠組みを再構築する時期にきていると考える。本発表では、主に「暴力」に関する研究を通して感じた、今後の考古学における研究手法の課題について考察する。

発表 2

「いま、日本の考古学について考える」

平川ひろみ¹

¹ 鹿児島国際大学 非常勤講師

非欧米圏において独特な展開をしてきた日本考古学は、そうであるがゆえに、考古学一般に果たす役割は小さくないと思われる。しかし、理論と研究方法、観察手法、遺跡調査法、科学的調査法、資料やデータのオープン化とアクセシビリティ、国際化・学際化など様々な側面において少なからず問題を抱えている。いま、日本考古学の現状を批判的にとらえ直してみる必要があり、それを通じて今後のあるべき姿について考えたい。

発表 3

「木を見て森も見ろ ―歴史時代の考古学における数量的アプローチの実践例―」

館内魁生¹

¹ 大阪大学 大学院 人文学研究科 学振PD

発表者は統計的分析や幾何学的形態測定学を用いた土器形状の分析に取り組んでいるが、数年前まではむしろ伝統的な分類・型式学に基づいた研究を行っていた。しかし、研究を進める中で、質的属性に基づく分類・分析の難しさ、扱える情報量の限界、個々の資料（＝木）と資料全体（＝森）のバランスなど、多くの課題に直面した。本発表では、平安時代の地域間交流の分析を例に、これらの課題とその解決方法を検討する。また、歴史考古学こそ数量的アプローチが有効であると提案する。

発表 4

「弥生・古墳時代における金属製武器の入手背景の再検討」

ジョセフ・ライアン¹

¹ 岡山大学 文明動態学研究所 特任助教

近年、古墳出現期の金属製武器の多様な来歴が注目されるようになってきている。従来重要視されていた初期ヤマト政権からの配布のみならず、有力者同士の授受や地域生産も指摘されている。このように研究は進展しているが、これら多様な系譜を包括した生産・流通論の構築が課題として残されている。そこで本発表では、生産と流通の多様性と重層性に注目しながら、古墳出現期における金属製武器の入手背景を再検討したい。